

(2) INTRODUCTION. (五十音図)

aア kaカ saサ taタ naナ haハ maマ yaヤ raラ waワ gaガ zaザ daダ baバ paパ
 iイ kiキ shiシ chiチ niニ hiヒ miミ iイ riリ i井 giギ jiジ jiヂ biビ piピ
 uウ kuク szス tszツ nuヌ fuフ muム yuユ ruル uウ guグ dzヅ dzヅ buフ puフ
 eエ keケ seセ teテ neネ heヘ meメ yeエ reレ yeエ geゲ zeゼ deデ beベ peペ
 oオ koコ soソ toト noノ hoホ moモ yoヨ roロ woワ goゴ zoゾ doド boボ poポ

ただし、現実の表記は、印刷の悪条件から不統一である。しかし、その不揃いの中に、幕末明治初期の発音の実態が反映しており、これからの研究に、本書『和英語林集成 初版 訳語総索引』が大きな力を発揮するであろう。

解説 2

II. 『和英語林集成』初版「英和の部」の訳語について

菊地 悟

1 「英和の部」の訳語の性格

本書でいう「訳語」は、欧米から入ってきた事物・概念を日本語で言い表わすための新造語に限らず、西洋語に対応するすべての日本語、すなわち英和辞書の場合、英語の訳として使われた単語もしくは句のすべてを指す。

現代の英和辞書においては、英語が特に新しい語である場合を除いて、どの辞書も同じような訳語を採用している。それは、明治以降、さまざまな辞書が登場する中で、その原語に対する訳語の取捨選択が重ねられ、一つの語形に定着してきたことによる。一つの訳語の定着のかけには、多くの訳語の消長の歴史が隠されているのであるが、その歴史とは、辞書編集者が先行する辞書の訳語をいかに選び、また改良して、取り入れていったかの歴史にほかならない。

ところが、幕末から明治期初頭にかけての英学勃興期の辞書編集者たちの場合には、頼りとすべき先行の辞書自体が存在せず、万を超える数の英語一つ一つに訳語をあてていくという作業を、無から始めなくてはならなかった。

森岡健二氏は、幕末期に相次いで発行された二つの英和辞典、『英和对訳袖珍辞書』（堀達之助編、文久2年）と『和英語林集成』初版の「英和の部」とを比較して、「ともに新しい訳語を造語していない点で共通しているが、その翻訳の態度は著しく異なっている」ことを、下表の例で示している。⁽¹⁾

	袖 珍	ヘ ボ ン
citizen	素姓正シキ都府ノ人、府中ノ住民	ヒト、チョウニン、ニンベツ
bank	金銀ヲ預リ替セヲ取組ム座	カネカシ
balcony	窓ノ前ノ張り出シ	エン、エンガワ、カイロウ

森岡氏は、『袖珍辞書』の翻訳法は「英語を新しい概念として捉え、旧来の日本語を用いて注釈する」のに対し、初版「英和の部」の翻訳法は「英語を日本語の新しい概念とは捉えないで、英語に対応する日本語、つまり英語の概念に近似する、もしくは類似する日本語は何かを求めようとする」という違いを指摘している⁽²⁾。いいかえれば、前者は「注釈法」、後者は「置き換え法」を採用している。

このような違いは、それぞれの辞書自体の性格の違いから派生しているようである。『袖珍辞書』

の場合は、英語を学習する日本人のために英単語の意味、用法を説明しようとしたものであり、他方、初版「英和の部」の場合は、外国人の日本語学習者が日本語で会話や作文をする際にどのような日本語を使えばよいかを教える、実用的な用語集のようなもの、と考えられる。初版「英和の部」の表題が、

AN INDEX ; OR, JAPANESE EQUIVALENTS FOR THE MOST COMMON
ENGLISH WORDS.

(索引、または、最も普通の英単語に対する日本語の同義語)

とされていることも、その性格を裏付けているのではないだろうか。

その性格は、訳語の語種構成にも現れていて、「英和の部」では、和語の比率が高い。森岡氏のサンプリング調査⁽³⁾では、和語が65.5%、漢語は24.2%、塩澤和子氏のAの部の名詞での調査⁽⁴⁾では、和語が49.1%、漢語が44.8%と報告されている。両者の結果の違いは、動詞、形容詞といった、和語の比率が圧倒的に高い品詞を含む、含まないの差であろうが、いずれにしても、他の、日本人の手による対訳辞書と比較して、かなり高い比率である。名詞の場合、漢語の比率も結構高いが、「町人、人別」など旧来の漢語が大部分である。再版・三版が、新造の漢語を取り入れることで漢語の比率を高めているのとは意味合いが違う。初版はあくまでも、旧来の語彙による置き換えが主流である。

従来の訳語研究が狭義の訳語(とりわけ漢語)に主眼を置いている以上、「置き換え法」による、初版「英和の部」の訳語は適当な対象とは言い難いかもしれない。しかし、視点を変えて、幕末期における日本語の実態を反映する資料として考えた場合には、その語彙構造を知る手がかりとして語彙史上の意義を認めることができるであろう。

2 「和英の部」非収録語彙

「英和の部」の訳語に日本語資料としての意義を見て行くに際し、最も留意すべきことは、第一部である「和英の部」との関係である。INDEXという表題のせいもあり、「英和の部」は「和英の部」の索引であるから「英和の部」の訳語はすべて「和英の部」に含まれている、という誤解もあるかもしれないが、実際には「英和の部」の訳語の中に「和英の部」に見えない語彙が相当数含まれている。

以下に、それら『「和英の部」非収録語彙』を紹介しておく(接辞・付属語は除く)。

〈和語〉

相纏う・仰向け・銅板・赤毛・垢付く・商人・呆れ果てる・揚げ鍋・揚げ場・悪し良し・預かり手・預かり物・預け主・集まり所・宛て名・後柱・後戻り・あらて・あらましく・歩き越す・歩きぶり・歩き回る・あるまじき・合わせ金・合わせて・憐み深い・言い落とす・言い飾る・言い損なう・言い潰す・言い直す・言い曲げる・言い漏らす・家付き・いがめる・

行き所・生き残る・息み過ぎる・軍船・生け返す・石灰窯・急がせる・急ぎ過ぎる・稲扱ぎ・命取り・卑しさ・卑しみ・いやます・刺草・色好み・上下・植え付け時・浮かせる・浮け木・受け止める・受け取り仕事・動き出す・打ち明ける・打ち崩す・打ち消す・討ち手・撃ち通す・移り病・腕輪・唸り独楽・唸り尻・奪い取る・うぶ愚か・海風・海手・売り勝つ・閏年・上面・えがくする・覆い渡る・大き過ぎる・仰せ付ける・大槌・大柱・大降り・大目・大喜び・置き換える・置き違い・置き忘れる・送り返す・桶屋・幼げ・教え込む・押し落とす・押し切り・押し越す・押し戻す・お喋り・踊り子・牡羊・覚え書き・お祭り・面白味・重すぎる・玩具屋・重み・思わず・思わぬ・親殺し・親指・織り合わせる・折り返す・織り混ぜる・おんぶ・買い方・買い戻し・買い戻す・買い物・飼い物・替え馬・顔貌・係りことば・繋り場・牡蠣殻・書き違う・書き手・書き物・隠れ場・かけ・駆け下る・駆け越す・駆け込む・駆け通る・陰日向・がさつ者・重ね掛ける・飾り物・風受け・風並み・風抜き・数え違う・堅さ・堅すぎる・勝ち手・勝手方・金板・仮名遣い違い・金物・がなる・金見・神様・かゆみ・刈り込む・刈り手・借り手・嘎れ声・革どゆ・革鞣し・革紐・変わり易い・木草・軋り合う・北西・着馴れる・厳しく・厳しさ・着破る・嫌いがち・切り替える・切り組む・切り出す・切り填める・食い過ぎる・食いたがる・くさざる・鯨狩り・楠の木・葉屋・口惜しがる・口伝え・靴屋・轡屋・首丈・凹める・くみする・悔ゆる・くらむ・車海老・暮れ合い・食わせ過ぎる・蹴落とす・毛皮・毛がわり・蹴下す・蹴出す・毛深い・小石・小腕・小言好き・心得違い・心得違う・心から・心違い・心なく・腰掛ける・小樽・事なく・言葉付き・熟し場・こなれがたい・小盗み・子猫・このとおりの・この前・好んで・子羊・子豚・小部屋・細かさ・独楽回し・小道・込み過ぎる・小山・壊れやすい・酒問屋・魚臭い・先くぐる・差し構う・為誤る・塩入れ・塩気・塩皿・塩焼き・仕返す・しからはば・仕事日・仕込み所・祖父・為過ぎる・仕付け時・為通す・忍び歩く・縛り付ける・萎める・搾り出す・染み透る・喋り手・しょっぱい・白紙・印板・皺める・吸い出す・透き通す・救い手・酸っぱさ・砂がち・滑り転ぶ・住まい所・住まい人・澄み切る・相撲取り花・ずるけ者・座り仕事・背高・銭投げ・攻め破る・競り商い・供え物・蕎麦粉・それら・高取り・宝物・竹釘・出山口・助け手・助け人・叩き切る・立ち退ける・立ち戻る・縦糸・立て直す・頼み所・田畑・食べ過ぎる・弾傷・弾堪え・樽口・だるさ・小ささ・ちつとも・血止め・千鳥掛け・乳豆・手斧・使い切る・使い損なう・疲れ過ぎる・吐き息・月形・突き壊す・月足らず・作り方・憤み過ぎる・謹んで・綱打ち・繋ぎ縄・坪数・爪立てる・積み過ぎる・積み高・積み荷・積もり過ぎる・積もり違い・積もり違う・出息・手返し・出来事・出口・手妻使い・遠からず・遠きさ・遠さ・通り道・説き明かす・説き明らめる・解き誤る・時ごと・時時・解き分ける・怒鳴る・飛び越す・飛び出す・とべり撃ち・とべる・取り組む・取り捌き方・取り過ぎる・取り手・採り用いる・どれほど・泥海・長靴・仲直り・中柱・流れ出る・中綿・なざる・投げ遣る・情け深い・なぜ・何ほど・何ゆえ・靡き易い・名前違い・鉛板・難なく・悩める・並

びない・荷馬・煮過ぎる・にやにや・糠雨・拭い落とす・抜け売り・抜け通る・抜け物買い・盗み物・願い出す・寝込み・換じ取る・根抜き・狙い歩く・野犬・野馬・残り物・乗せすぎる・覗き見・のたる・野花・飲み抜け・乗り方・乗り過ぎる・乗り手・はかなさ・計り過ぎる・計り違う・吐き棄・接ぎ子・激しさ・化け物屋敷・運び返す・運び込む・運び出す・走り降りる・走り越す・走り込む・はしれる・機織り・旗持ち・花鬘・鼻声・歯磨・早過ぎる・払い過ぎる・払い日・針仕事・引き息・引き違ふ・引き付く・引き払う・引き巻き・小舌・引っ付く・一足・日取り違い・ひとりでに・檜物屋・ひよひよ・拾い子・広さ・広め書き・深める・吹き落とす・吹き出る・豚飼い・二つながら・蓋物・打ち合い・打ち合う・打ち落とす・筆任せ・船道・踏み木・踏み車・踏み止め・踏み渡す・部屋方・星占い・干し草・ほぞ穴・細声・細さ・細縄・細やか・骨折りすぎる・前書き・前柱・前払い・前帆・負け方・孫娘・混ざる・升物・混ぜ合わせる・混ぜ物・又貸し・又木・待ち伏せる・まっついで・塗れ付く・見頭わす・三重・見覚え・見覚える・身拵え・見越す・見定める・水桶・見立て違い・三つ足・三つ掛け・御名・南風・見放す・耳垢・六重・報いたがる・虫穴・虫抑え・虫葉・娘らしい・めあわせる・目上・牝豚・も・申し入れる・申し付け・申し述べる・燃えやすい・用い誤る・持ち返す・持ち主・纏れ合う・持て成し方・持て行く・貰い過ぎる・貰い手・焼きすぎる・焼き直す・焼けしまう・焼け果てる・焼け山・養い物・休まる・安ら・痩せ顔・宿並み・湯桶・行き越す・弓手・夜明かし・四重・呼び違える・読み落とす・読み通す・嫁どり・寄り付く・選り分ける・よろしさ・りんりん・わかりやすい・藁葺き・藁屋根

〈漢語〉

悪婆・悪筆・安南国・一人・一年・一文・一両・一統・有情無情・英・縁談・隠密・夏・界・外国人・外国奉行・改宗人・街道・海風・外面・学堂・火山・月食・月水・家督人・家内中・感動・偽君子・議定・偽善者・逆人・給仕人・旧約・旧友・急流・虚字・記録者・金細工人・九月・九十番・愚人・九番・郡・軍器・家・月経・解毒剤・げんごん・見物人・見聞・高・薨去・豪勇・五月・五十番・五升・後世・御殿・五番・困窮人・今時・今世・西・裁判所・裁判人・左袒人・殺虫剤・砂糖菓子・酸・賛・散財家・撒糸・三十番・三度・三倍・三番・四合六勺・自殺・四十番・四層倍・七月・七十・七層倍・七番・十戒・漆器・十層倍・次男・死物・四枚・十一・十一番・十九・十九番・十五・十五番・十三・十三番・十四・十字架・十七・十四番・十二・十二番・十八番・十番・十万・獸類・十六・酒食・出奔人・旬・将棋盤・状質・初学・助語・諸大将・初版・心・神学・神学者・人力・聖・聖經・西南・西北・世界一統・石・跡・切・絶妙・施薬所・船将・千倍・千番・千分一・大部・多半・短・弾ずる・談話・知行所・地中・中品・中立・痛風・敵対・鉄道・天運・冬・答・同国・同国人・同時・東南・東方・東北・動脈・時計師・曇天・南風・肉身・二合三勺・二十層倍・二十倍・二十番・二升六合・二斗二合・二版・二里半・人足賃・脳・売卜師・白蠟・八月・罰金・版・半年・飛脚賃・柄杓・筆者・百四十四・百年・百番・百余人・百斤・無愛想・不塩梅・風船

不運・副詞・不合・不死・不正・不正直・不親切・普請役・不相当・無難・腐薬・兵術・兵法・母音・北極星・叛逆人・本書・本当・馬医者・密売・無形・無情・謀反人・目・文・勇・雄・右筆・予言者・裸体・卵塔場・料理人・累・れんだい(連代か)・六月・六十番・六層倍・六枚

〈外来語〉

アメリカ・インド・キリシト・ゴム・コンシュル・ドラ・ドル・ドンドル・フランス・ポンプ・ミニストル・ヤラッパ・ヨーロッパ・レイフルタラン

〈混種語〉

賤い金・賤い人・あくげ・預かり人・穴一・案じ過ぎる・疣痔・鋳物師屋・受け取り人・裏門・柄雑巾・お天気・オランダ人・御経・学者ぶる・駆け落ち人・渴する・曲尺・勘定書き・勘定方・願立て・気掛かり・気軽・寄進札・気違い人・キナ塩・気細い・気持ち・客相手・斤目・口止め金・九番目・車師・解し違い・喧嘩好き・高利貸し・九つ半時・五十番目・胡椒入れ・拵え様・御親父様・伍す・五ドル・小荷駄馬・五年余り・碁盤縞・五番目・小楊枝・堪え情・婚礼振る舞い・作する・砂糖入れ・莢豌豆・産する・残念がる・三番目・しおげ・地方役人・地借り・七十番目・七番目・七匁二分五厘・慈悲深い・仕法書き・十一番目・十一目・十五番目・十番目・十六番目・生写し・証拠書き・称する・賞する・小説物・常値段・小便袋・女郎買い・女郎屋・暑気当り・陣構え・信じ難い・推量違い・陶物師・洗濯屋・損する・1210坪・大事がる・タバコ屋・屯所・旦那顔・血止め道具・茶商人・中位・誅する・月役・鉄板・手伝い人・鉄砲狭間・手習い師匠・時計屋・肉屋・二番目・二羽・人相見・運び賃・罰当たり・八匁二分三厘・針金師・版摺り台・飯台敷き・半年・引き受け人・引き算・飛脚屋・卑怯者・百ドル・百日咳・武器庫・不精者・葡萄葛・葡萄畑・平均相場・変化する・法書き・帆木綿・本柱・翻訳違い・巻き木綿・増し算・魔使い女・償い金・真似衆・馬乗り・身請け金・無理取り・元金・焼きパン・焼き明礬・訳する・用心深い・寄せ算・四番・癩病病み・ラシャ綿・乱心者・了簡違い・狽する・両刃・利欲がち・礼儀過ぎる・蠟の木・牢守り
これらの語彙が「和英の部」に収録されなかった要因としては、次のようなことが考えられる。

「和英の部」にも収録語数の制限がある以上、敢えて説明を要さない意味が自明な語彙、あるいは、一般的な日本語の語彙には含まれないような特殊な語彙が落とされた、ということである⁽⁵⁾。

前者の例としては数詞をはじめとする複合語があげられるが、後者の例には、外来語はもちろん、「解毒剤・裁判所・動脈」など、蘭学者によって使われていた語彙が含まれている。⁽⁶⁾ こうした語彙は、「置き換え法」に使われる語彙として既に定着していたが、「和英の部」に収録されるほど一般化してはいなかった、ということ推察することも可能であろう。

こうしてみると、初版「英和の部」の訳語には、「和英の部」を補完する日本語資料としての意義が認められる。しかも両者を対照することで、一般的な語彙と訳語語彙の差を知ることができるのである。

3 訳語の不備——「置き換え法」の限界

「英和の部」については、以上のように日本語資料としての意義は十分に認められるが、やはり「英和辞典」としては不備な点が多かったと言わざるを得ない。再版と比較すると、初版の訳語に何らかの不備があった場合には、その訳語は再版で削除されている。それは、以下のような場合である。

① 品詞が原語と対応していない場合

〔原語〕	〔初版の訳語、下線は削除されたもの〕
AVERSE	嫌う、 <u>気に入らぬ</u> 、嫌がる、厭う
CONFRONT	向かう、対する、 <u>相向かい</u>
DEFFIDENCE	はばかり、遠慮、辞讓、 <u>面映ゆい</u> 、 <u>おめる</u> 、内気
DROWSY	眠たい、 <u>居眠り</u> 、眠い
HUNGRY	ひだるい、ひもじい、 <u>かつえる</u>
STAMMER	吃る、 <u>ことおそい</u> 、口ごもる

これは、初版の品詞表示が漠然としたものであったことと照応している。

② 原語の意味の範囲より広すぎたり狭すぎたりする場合、類似するが別物の場合、等

AUTHOR	作者、 <u>選者</u>
CHILDREN	<u>子供</u> 、子供等
DRAY	<u>車</u> 、大八車
EEL	うなぎ、 <u>穴子</u>
FARE	賃、代、食事、運賃、駄賃、 <u>船賃</u>
PRINCE	<u>大名</u> 、太子、宮、世子
TRIGGER	ひきがね、 <u>火蓋</u>

多少の意味の違いは無視した「置き換え法」も、行き過ぎると誤訳になってしまう。再版では、そのあたりをより厳密に考えたのであろう。

③ あまりに日本的、文語的、俗語的な語彙の場合

ACCEDE	承知する、 <u>合点する</u> 、納得する、 <u>うけひく</u>
BRACELET	腕輪、 <u>環</u>
COFFIN	棺、ひつぎ、 <u>早桶</u>
CRANE	鶴、 <u>田鶴</u>
DAWN	夜明け、曙、暁、 <u>東雲</u>
RAILROAD	<u>蒸気車道</u> 、鉄道
SENTENCE	句、言い付け、申し付け、申し渡し、 <u>凶状</u>

VERMIFUGE | 虫抑え、殺虫剤

意味上は問題ないが、使われる位相が限定されるような語彙は削除して、より一般的な訳語に絞ったようである。

②、③の場合はいずれも、初版の「置き換え法」が行き過ぎであった、という欠点をヘボン自身が認識しての削除と思われる。ただ、初版の時点でのヘボンが、不適当な点は承知の上で「置き換え」を行なったのか、正しいと誤解して不適当な訳語を選んでしまったのかは、推測のしようもない。

「英和の部」は、「和英の部」同様、基本的にはヘボンの日本語学習の成果である。そこには必ずと限界がある。

たとえば、初版でも、次の2語は、訳語を与えられていない。

KISS, No equivalent for this word in Japanese.

RIGHTEOUS, I know of no word in the Japanese language answering to this word or to the word Righteousness.

前者については、外国人が人前で公然と行なう、挨拶としての「キス」の習慣が日本人になかった以上、日本語に同義語がない、という説明もうなずける。しかし、後者については「正義」とか「公正」を意味する日本語が全く無かったというはずはなく、ヘボンがたまたま知らなかっただけなのであろう。もっとも、それは初版当時の日本語教師であった岸田吟香の理解語彙の問題に帰せられる可能性もある。

このように、編者の日本語の知識に限界があった以上、初版の訳語に不適当なものが混じっていることも致し方ないであろう。

ともかく、当初の予定になかった「英和の部」を上海で短期間に編集したという事情を考えれば、不備があるのは当然かもしれない。INDEXという表題自体、ヘボンの謙遜の表現とすることも考えられる。その反省をこめてか、5年後の再版では、「英和辞典」としての形が整えられるに至るのである。

注

- (1)(2) 『英和口語辞典』第3版の翻訳語について (『英和口語辞典』第3版復刻版の解説、1985、名著普及会)
- (3) 「訳語の変遷——語構成を中心として——」 (『東京女子大学比較文学研究所紀要』1、1955)
- (4) 「和英語林集成・英和の部の訳語」 (『(上智大学)国文学論集』14、1981)
- (5) 菊地悟『和英語林集成』初版「英和の部」の「和英の部」非収録語彙 (『国語学研究』31、1991) に詳述した。
- (6) 斎藤静『日本語に及ぼしたオランダ語の影響』(1967、篠崎書林)の記述や、『日本国語大辞典』の用例による。